
けいおん 男子部員が入ったら

クラウド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん 男子部員が入ったら

【Nコード】

N 8 6 9 7 M

【作者名】

クラウド

【あらすじ】

友達もいない、いじめられ続けた少年が桜が丘高校に編入し主人公達と部活動が始める。

初登校！（前書き）

これはファンフィクションです。
実際のけいおんとは違いますので、ご了承ください。

初登校！

夏が終わり、二学期が始まったころ

今日から共学になった

私立桜が丘高校に編入する事になった僕は

たんと、通学路を歩いていく。

僕の名前は、桜咲 稜 さくらざき りょう

朝早く家をでてしまったせいか
道に人がいない。

「うまくやっていけるかなあ。」

などと言ってる間に桜が丘高校に着いてしまった。

そして、時が過ぎて……

先生につられ、一年二組の教室に来た。

自己紹介を済まし、指定された席に着いた。

休み時間に入り、机の整理をしていると

「桜咲君」

隣から声をかけられた。

ふと隣を見ると、

黒髪のツインテイルの女の子がいた

僕 「なに？」

梓 「私、中野梓っていうんだあ。よろしくね」

僕 「あ、うん。よろしく」

そんなこんなで

これから新しい高校生活が始まるのだった。

初登校！（後書き）

すごく終わり方が中途半端ですいません。

これぐらいに切っておかないと

長くなりすぎるので

切りました。

本当に中途半端ですいません。

入部！

桜が丘高校に登校し始めて

もう一週間が過ぎていた。

一週間で友達が何人かできた。

友達が今までいなかった僕には、奇跡みたいな事だ。

今までいじめられてきた僕は

学校はすごくつまらない所だと思っていたが

桜が丘に来てからは、まるで違う。

学校のイメージが180度変わった。

そこで今、部活に入ろうとしている。

その部活の名は・・・軽音部。

僕が軽音部に入ろうと思った理由は、
ベースとギターができるし、
音楽が好きだからだ。

だから今、入部届けを出し終え、

部室の前に立っている。

ドアノブに手を掛け、

ドアを開けた………

僕 「こんにちは」

机に座った5人が、
一斉に振り向く。

梓 「稜くん！」

律 「何？梓の知り合いか？」

梓が駆け寄ってきた。

梓 「なんでここに？」

僕 「えと、軽音部に今日入部したんだ」

5人 「ええ、うそおお！？」

すごく驚いてる様子だ。

僕 「なにもそんなに驚かなくても……」

梓 「いや、驚くよお、だって男子部員なんて初めてだもん」

律 「じゃあ、今年二人目だな！」

紬 「とりあえず、お茶でもいいかが？」

漣 「そうだな、ひとまず落ち着こう」

唯 「おいで、おいで」

なんか手招きしてる……
行ったほうがいいのかな？

とりあえず、僕は用意してもらった椅子に座った。

律 「じゃ、まず自己紹介だな。私は部長の田井中律。ドラムやってまーす」

なんか元気な人だな。

漣 「私は、秋山漣。ベースやってるよ」

大人っぽいなあ。

紬 「私は琴吹紬。キーボードやってまあす」

ぼわぼわだあ。

唯 「私は平沢唯。ギターだよあ」

おお、天然っぽい。

梓 「私はもう知ってるよね。ギター弾いてるよ」

僕 「僕は桜咲稜です。一応、ベースとギターできます」

梓 「へえ、ベースとギターできたんだあ」

唯 「なにか弾いてみて」

つとギターを渡してきた。

唯 「ああ、ギー太が浮気を……」

律 「お前が渡したんだろ」

僕 「じゃあ、弾いてみます」

僕はお気に入りの曲を弾いた。

パチパチパチっと、拍手された。

実はこれが初めて人に見せる演奏だった。

梓 「稜くん、うまい！」

紬 「稜くん上手」

漣 「稜、うまいじゃないか」

唯 「おおおお」

律 「うまいじゃん」

僕 「そ、そうですか？」

5人 「うん」

僕 「よかったあ、下手つとか言われたらどうしようかと思いました」

梓 「自信持っていていいよお、上手だったよ」

律 「ギター3決定だな」

僕 「はい！」

そして、時が流れ……

漣 「じゃ、また明日」

律 「そんじゃな」

紬 「また明日」

唯 「ばいばい」

僕は先輩達と別れて、梓と帰っていた。

梓とは家が近く、帰る道も同じだ。

梓 「綾くんのギター、上手だったよね」

僕 「ありがとう。人前で弾いたの初めてだったよ」

梓 「そうなの？私てつきり友達の前とかでいつも弾いてるのかな
って思ってた」

僕 「そう」

ちよっぴり僕は切なくなつた。

二人でしゃべりながら歩いていると、

梓の家が見えてきた。

梓 「じゃあ、また明日ね」

僕 「うん。じゃあね」

梓 「あ、稜くん！」

僕 「なに？」

梓 「明日いつしよに行かない？」

僕 「うん。いいよ」

梓 「じゃあ、ばいばい」

僕 「ばいばい」

明日かあ。

楽しみだな。

僕は、明日が待ち遠しくなった。

入部！（後書き）

さて、軽音部に入部した稜は
これからどんな生活をおくるのでしょうか。
楽しみです。

お泊り！（前書き）

すいません。

書いて直しての繰り返しで遅くなりました。
ホントにお待たせいたしました。
お楽しみください。

お泊り！

チリリリリイイイン

いつもより早く起きた。

今日は楽しみにしていた梓と登校する日だ。

リビングに向かい、朝食を作る。

もう何年もこうしてきた。

朝食を済まし、準備をして外に出た。

歩いて梓の家に向かい、インターホンを押した。

すぐドキドキしている。

誰かと一緒に登校するのは、今日が初めてだった。

梓 「おはよう」

僕 「おはよう」

梓 「あ、それが稜くんのギターかあ」

僕は今日ギターを持ってきていた。

僕 「うん。ずっと持っているとおもいなあギターって」

梓 「すぐ慣れるよ。でも肩痛くなるんだよね」

僕 「明日、肩こってそうだなあ」

梓 「ふふ」

僕 「そういえば、梓っていつからギターやってるの?」

梓 「四年生からだよ。稜くんは?」

僕 「僕は五年生から。」

梓 「だから稜くん上手なんだあ」

僕 「梓も上手だったよ。完璧だったじゃないか」

梓 「そうかな・・・ありがとう」

僕 「梓もありがとね」

梓 「うん」

色々と話していると、学校に着いた。

そして教室に着いた。

憂 「梓ちゃん、稜くんおはよう」

二人 「おはよう」

憂 「稜くん軽音部入ったんでしょ？お姉ちゃんから聞いたよ」

僕 「うん」

梓 「稜くんギター上手なんだよ」

憂 「へえ、聞いてみたいなあ」

僕 「唯先輩と梓にはかなわないよ」

梓 「そんな事無いよ」

そんな会話をしていると・・・

純 「おはよ」

憂 「純ちゃんおはよう」

梓 「おはよう純」

僕 「おはよう」

純 「昨日、軽音部の人達といたけど、どうかしたの？稜」

僕 「昨日、軽音部に入ってたんだ」

純 「ええ、うそおおお！？」

僕 「なんかそれ二回目・・・」

梓 「軽音部のとくと同じ・・・」

純 「なんの楽器やるの？」

僕 「ギターになつたよ」

純 「へえ、ギターできたんだ」

梓 「あ、それと、稜くんベースもできるんだよ」

純 「ええ、うそおおお!？」

僕 「三回目ですか・・・」

純 「今度聞かせてよ」

憂 「私も聞きたい」

梓 「私もベース聞きたいなあ」

僕 「わかったよ。じゃあ今度ね」

三人 「うん」

今日はいいい日になりそうだ。

そして、時が過ぎ・・・放課後

漣 「あの〳〵曲打ち合わせとかしたいんだけど」

律 「今日は時間がないなあ」

唯 「ホントだ。もうこんな時間」

律 「しかも明日から二日間休みだしなあ」

梓 「文化祭も近いですし、どうします?」

僕 「あの、曲の打ち合わせってそんなに急がなきゃダメなんですか?」

漣 「うん。文化祭でやる曲だけを練習するから」

律 「今年は曲数多いもんなあ」

紬 「じゃあこんなはどう?お泊り会とか」

ムギ先輩、うれしそうだな。

律 「お、賛成。楽しいし、一気に決められるしな」

漣 「でも、どこに泊まるんだ?」

唯 「それなら、家においでよ。誰もいないよ」

律 「うんじゃ決まりだな。今日の夜、唯の家に集合な」

漣 「でも憂ちゃん大丈夫か?」

唯 「今メールしたら、おkだつて」

紬 「わくわく」

梓 「お泊りだなんて久しぶりだなあ」

お泊りつて・・・僕男だけど・・・いいのかな・・・

僕 「あの、その、えと、僕なんかが行っていいんですか？」

律 「何言つてんだよ。軽音部だろ」

唯 「いいんだよーおいでよー」

漣 「いいに決まってるじゃないか」

紬 「楽しいわよ」

梓 「稜くんも来ていいんだよ」

僕 「うん。行きます」

律 「んじゃ、これで一時解散な」

そこでひとまず解散した。

梓と一緒にいくことになった僕は家に帰り準備をしていた。

下着、ジャージ、筆箱、メモ帳、タオル、日記。

よし、完了。

あとは、お土産だな。途中で買っていこう。

家を出て、梓の家に向かった。

インターホンを押す。

しばらくすると、梓が出てきた。

梓 「お待たせ」

僕 「おお、私服初めて見た」

梓 「そうだっけ？どう？」

僕 「かわいいよ」

梓 「・・・ありがとう」

僕 「えと、お土産買って行ってもいい？」

梓 「いいよ」

僕らは店に寄り、唯先輩の家に向かった。

ピンポン。

しばらくすると、憂が出てきた。

憂 「いらっしやい。上がった」

僕 「はいこれお土産」

僕は、せんべいの箱を渡した。

憂 「ありがとう」

梓 「あ、憂、私もお土産」

憂 「梓ちゃんもありがとう」

二人 「お邪魔します」

リビングに行くと、先輩達が居た。

律 「お、やっと来たか。」

漣 「じゃあ、打ち合わせ始めようか」

しばらくして。

律 「あゝ終わった」

律先輩は背伸びした。

梓 「楽しみですね」

唯 「やっと・・・終わった」

その後、みんなで夕食を済ませ。

一息ついたころ。

律 「いい事思いついた！」

唯 「何？」

何だろう。

紬 「わくわく」

律 「王様ゲームやろうよ」

澪 「ええええ」

唯&紬 「やりたい！」

梓 「どうしようかなあ」

律 「稜はどうする？」

僕 「やってみたいです」

律 「憂ちゃんは？」

憂 「やりたいです」

律 「じゃあ決まりだな」

律先輩が、割り箸に色を塗ってる。

あれを引けば王様らしい。

律先輩がすべて混ぜて、みんなの前に置いた。

みんなは引いた。王様は憂になった。

憂 「じゃあ、2番が4番の肩を揉む」

唯 「あ、私が2番だ」

漣 「私は、4番」

唯先輩が、漣先輩の肩を揉みに行った。

漣 「唯、うまい・・・んう・・・そこお」

律 「・・・エロい・・・」

紬 「・・・はああ・・・」

紬先輩が、なんか、すごくうつとりしてる。

梓 「声が・・・エロい・・・」

なんか・・・ほんとにエロい。

律 「まあ・・・次いこう」

みんなでくじを引いた。

律 「よっしゃ、私が王様だあ」

唯 「なにかな？」

紬 「わくわく」

梓 「なんだろう」

ホントなんだろう。

律 「5番と1番がキス！」

稜・梓 「えええええ！！？？？」

梓 「って稜くん・まさか・・・」

僕 「梓も・・・なのか・・・？」

律 「どれどれ？見せてみる」

律先輩が僕と梓のくじを取った。

僕が1番で、梓が5番だった。

漣 「律、いくらなんでも・・・」

唯 「うわぁ・・・あずにゃん・・・」

梓の顔が赤い、たぶん僕も赤くなっているだろう。

律 「でも、王様ゲームだからしかたないぞ」

紬 「梓ちゃん……がんばって……」

憂 「……ときどきしてきた……」

梓 「私なんかで……稜くんは……いいの？」

僕 「全然……大丈夫……けど、梓も僕なんかでいいのか？」

梓 「……うん……」

僕 「じゃあ……するよ……」

梓 「……うん……」

梓が目をつむり待っている。

僕は唇を近づけた。

やわらかい感触とともに、甘い味がした。

キスが終わった後、またも、目が合った。

まだ、心臓が激しく動いている。

って何さらっと大仕事してんだ〜！？

律 「ふっふっふ、私に感謝するんだな・・・イテテテ」

律先輩のホッペをつかんだ。んな恥ずかしいことを口にだすな！

そのあと王様ゲームは続き、時刻は9時を回ったころ。

唯 「あ、もうこんな時間」

憂 「お風呂沸かしましたよ」

なんとタイミングがいいんだろう。さすが憂。

律 「じゃあ誰から入るんだ？」

唯 「じゃんけんで決めない？」

律 「そんじゃ、じゃんけんな」

そういうことでジャンケンになった。

全員 「ジャンケンポン！」

結果は、

一番 梓

二番 唯

三番 紬

四番 憂

五番 澪

六番 稜

七番 律

になった。

律 「よかったな〜 綾〜 女子が入った後で〜・・・イタッ」

漣 「恥ずかしい事をいうな！」

漣先輩の拳が飛んだ。と同時に、自分もホッペをつねった。

梓 「じゃあ入ってきますね」

みんなが風呂に入っている間、ボーっとしていた。

さっきのキスのことだ。

まだあの感触を忘れられない。

なにより、梓の顔が頭から離れない。

これは・・・・・・恋か？

そんなことを長々と考えていたら、順番が回ってきた。

漣 「あがつたぞ〜」

僕 「じゃあ、入ってきます」

自分のカバンを持って風呂場に向かった。

そして時が過ぎて・・・・・・・・

夜になった。

僕の寝る場所は一階のリビング。

先輩達は唯先輩の部屋、梓は憂の部屋で寝るそうだ。

今日は、寝ようとしても寝付けない。

頭の中が梓の事でいっぱいだからだ。

ボーっとしていると・・・・・・・・

ガチャッ

ドアのほうを見るとそこには梓がいた。

梓 「稜くん、起きてる?」

僕 「起きてるよ」

梓 「稜くん・・・あの・・・その・・・一緒に寝てもいいかな・・・」

僕 「・・・いいよ・・・」

梓が布団に入ってくる。

心臓が、さっきより激しく動いている。

梓 「今日ね．．．眠れないんだ．．．」

僕 「僕も．．．眠れないよ．．．」

布団の中で向かい合った。

梓 「キスしたときから．．．なんか．．．どきどきしてて．．．」

僕 「僕なんかで．．．よかったの．．？キス．．．」

自分で言っけて恥ずかしい。

梓 「．．．うん．．．」

僕 「そうか．．．よかった．．．」

梓 「なんで．．．そんな事聞いたの？」

僕 「嫌じゃなかったかなって．．思ってたさ．．．」

梓 「嫌だなんて．．そんな．．そんな事無いよ．．．」

「むしろ．．．嬉しかったし．．．」

僕 「え？．．．今．．なんて．．？．．．」

最後方は声が小さくて聞こえなかった。

梓 「なんでもない．．．」

「なんか・・・眠くなってきた・・・」

僕 「じゃあ、寝ようか・・・」

梓 「うん」

梓が抱きついてきた。

僕 「え？・・・梓・・・？」

梓 「今日は・・・こうして・・・寝たいから・・・嫌だった？」

むしろ嬉しいくらいだよ・・・梓・・・。

僕 「嫌じゃないよ・・・」

梓 「よかった・・・」

その後、僕は眠りに落ちた

不思議とそのときは、眠れた

ホッとしたからだろうか

そして・・・朝・・・

起きた時には遅かった・・・

律 「・・・これは・・・ラブラブですなあ」

唯 「軽音部にカップルができちゃったね」

僕 「……んう……。あれ？……先輩？？」

「つて！？……」

目の前を見ると、梓が気持ちよさそうに寝息をたてている。

梓 「……ふう……。ふう……。ふう……」

さらに、僕の背中に手を回したままで、体が密着状態のまま離れない。

周りには、顔を赤くした漣先輩と、同じく顔を赤くした憂、顔を輝かせている紬先輩と唯先輩、ニヤニヤした律先輩がいた。

律 「しっかりと写真撮らせてもらったからな……」

僕 「写真！？それをどうするつもりですか！？」

梓を起こさないように小声で言った。

ちよ……。それはまずい……。律先輩ならば撒きかねない。

漣 「ごめん、稜……。止めれなかった……」

梓が起きたようだ。

梓 「……。んう……。稜くん……。おはよ……」

「・・・んう？先輩・・・あああ！！？」

梓もこの状況に気づいたようだ。

顔を真っ赤にしている。か、かわいい。

体を離す。少しさびしいが。

律 「ふっふっふ、お二人さん」

唯 「これで、カップルだね！」

唯先輩余計なこと言うな！！

梓 「こ・・・ここ・・・これは・・・ううう」

律 「梓くガツシリ抱きついてたな」

梓 「そそそ、それは・・・」

漣 「律、困ってるだろ」

漣先輩、ありがたい！！

律 「あれく？たしか漣もじつと見ていたような気がするな？」

漣 「み、見てない見てない！」

梓 「漣先輩まで！？」

梓 「恥ずかしい……」

この後、みんなから質問攻めにされた。

はぁ……どうなることやら……。

今日は梓とさらに仲良く？なれたのでした。

お泊り！（後書き）

なんか中途半端になってしまったような・・・

それはさておき、次話では
意外な展開に、なると思います。

ああ・・・遅くなりそうだなあ・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8697m/>

けいおん 男子部員が入ったら

2011年3月6日11時01分発行